

2

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「どんべえ」は「私」が生後三、四か月のころから育てているメスのヒゲマである。あるとき、「私」のポケットの中に入ったおやつを探そうとした。「どんべえ」は、初めて攻撃をしかけてきた。後足で立ち、肩を怒らせた。「どんべえ」は、明らかに敵意をもって「私」に反抗してきたのだった。

いつかはくる、そのようなときがくる——と私は覚悟はしていた。子ぐまはやがて成長し、実の母親とさえかみ合いをして子別れの儀式をすませるのだ。むちで調教をしない限り、いつかはそんなときがくる。親しければ親しいほど、\*のつぴきならぬ衝突がさけられぬ。

私はどんべえをにらみつけた。

① どんべえはのどの奥から、クハ、クハ、と聞こえる攻撃音を出した。それは私たちが親しい間柄にならぬときに聞いて以来、絶えて久しく私やヒゲには、アビせられたことのない声であった。

私は踏みこんだ。

「ふざけるな。」

しかりとばした。

このおれに対して、攻撃をしかけてくるなど何事であるか。怒りがむらむらとこみあげてきた。ふざけるな。冗談じゃねえや。なめられてたまるか。

踏みこむと、どんべえは後ずさった。そして、自分が後退したことに、自ら腹を立てたようだった。

クツ、ハー。

攻撃音が激しくなると、顔の縦じわがいつそう深くなった。きばがもうくつきり見えた。唇がめくれあがっている。奥歯をこすり合わせる音がした。

私は危険を感じた。

同時に、すでに身をひくことはできないと感じ取ってもいた。一歩後退するのは死につながるだろう。ましてや安全な所へ出ようと後ろを見せれば、くまはとびかかってくるにちがいない。それは親しさとは別のものだ。いつかは力と力で対決しなければならぬ野性の論理である。

死か——。

それもよからうと私はちらと思つた。小さいころから、手塩にかけて育てた友人にばらばらにされるのは、\*ムツゴロウにふさわしい。

私はにやりとした。その笑いをほおから消すと、しんと落ち着いた心境になった。すでに自分の生や死は問題ではなかった。③ 今、

この瞬間を最高に生きてやれ——そういった闘志のようなものが怒りといっしょになって胸の内でもふくれ、目がかがやくのが自分で分かった。私は自分が透明になった気がした。

どんべえは私にとびかかろうとした。けれども、④ 何かに制せられ、

グツ、ワー……。

⑤ ライオンみたいにほえた。それは私が初めて聞く、雄々しい、野獣らしい咆哮だった。

攻撃にストップをかけたものは、たぶん私との生活の積み上げだったろう。けれどもそれにあまえていい場合ではなかった。殺るか殺られるか。決着をつけねばならぬ瞬間が刻々と近づいている。

⑥ 私は踏みこんだ。無言で、ひとみに力をこめ。

どんべえが後退した。

「このやろう。」

私はどなりつけた。

どんべえが、うわあ、と絶望的な声を出した。これ以上近づいてくれるなどいつているようでもあった。しかし表情のゆがみはそのままだった。私にはそれが邪悪じあくなものときえ映った。

たとえどんなに小さな動物であつても、追いつめられたところで、一転してしんけんにはむかつてくるときは非常にこわい。たぬきやきつねが逃げるのをやめ、きばをむき出しにしてほえたてる姿には魔物まぶつじみた迫力がある。彼らはそれこそ全存在をかけている。死んでもいいという気迫がじかに伝わってきて、大の男がすくんでしまう。ましてやどんべえはくまだ。それも二百キロをこえた巨体をほくるくまだった。

くるつたようにほえ、全身の毛を **Ⅱ** 逆立さかたててて反抗するさまはみごとだった。もし動物を全く知らない人が前に立たねばならぬとしたら、そのあまりのすごさに圧倒され、心臓麻痺まひか何かで死んでしまふだろう。

私は自分の命が、薄い、一枚の紙になつたのが見えるような気がした。小石一つで穴が開くし、ましてや、つめをかけられれば、それで終わりになってしまう……。

それでも前に踏み出した。すると、どんべえが絶望的な大声でほえたてた。耳が聞こえなくなるくらいのも、とてつもなく大きな声だった。

体のどこかで、私は感動していた。これでこそ動物だと、そのただけしさにうっとりしていた。けれども、半面、負けてたまるかという熱いものもあった。

——ここで負けてたまるものか。おれはおまえの赤ん坊を取り上げるのを楽しみにしてこれまで生きてきたんだぞ。

自命の生死は天のみが知っている。どんべえよ、お前が自立のためにおれを倒さねばならぬのなら、ようし、正面からかかってこい。おれを倒して一人前のくまになれ。

闘志が全身にあふれ、私は闘うことだけに集中した。

「やるか、やろうめ。」

吐き捨てるようにつぶやいて、私はまた前に歩を踏み出した。

顔と顔はもう、くつつかんばかりだった。私の目から十センチとはなれていない所で、どんべえのきばがひらめき、※肺腑はふをえぐるようなほえ声がひびいた。

私も負けずに、ありつたけの声でほえた。胃や腸がとび出すのではないかと思えるほど口を開いて。

どんべえは後退しつつ、右の前足で私をなぐりつけた。

攻撃は、一瞬木立をかけぬける風と同じだった。私の左のほおが切れ、ジャンパーがさけた。肩から腹まで、ざっくり、三つの割れ目できていた。

もしまともに当たったら、私は血へどを吐いて倒れたらう。それで一卷の終わりだ。

どんべえは明らかに手かげんをしたのだろう。しかし、手かげんしつつも攻撃をしかけたことで、怒りはさらにふくれあがったらしく、目の充血じゅうけつは **Ⅲ** チョウテンちやうてんに達していた。 **⑤** 双の目が赤く燃えるようだった。

私も火の玉になっている。

踏みこんだ。

相手がパンチを繰り出そうと身構えかけているところへ、私のストリートが飛びこんだ。こぶしがひねりを加えながら、ほおの、犬歯のすぐ後ろへ食いこんだ。グラブをつけている試合ではないので、

衝撃しょうげきがもろにこぶしに集中し、指の骨が折れた感じがした。

「ばかぐまめ。」

私はどなった。あまりにもしんけんであったため、声が割れ、のどが痛んだ。

なぐられたどんべえは、うろたえる表情をうかべた。しりを後ろに引く。下から見上げる目つきが卑屈ひくつになる。

勝った、と私は自信を持った。

勝ち負けを争う勝負事ではないけれど、逃げようのない形で対決した二つの命の間に結論が出たのである。

私はさらに踏みこんで、右フックを振り下ろした。どんべえは首を振ってさけ、右フックはみごとに空を切った。

「やろうめ。」

私はもう一発きついパンチを見まおうと、こぶしを引きつける。と、どんべえが逃げた。

追う。

どんべえは、プールの中へ飛びこんだ。水から顔だけを出し、唇をとんがらかして、あまく※くぐもった声で長く鳴いた。

その前に仁王立ちになり、

「このやろう、どんべえめ。好き勝手をすると承知しないぞ。」

しかると、どんべえは、首を曲げ、唇の両端りょうたんを下へさげて、まるでゲームでもかむように、くちやくちやくと舌を鳴らし始めた。それはどんべえが幼時に見せた、ごめんなさいのしぐさであった。

大きなくまが、ごめんなさいを――。

胸がいっぱいになった。

「もうよし、おいで。」

私は涙声なみだこゑになり、優しく言った。

どんべえはまだ、顔を曲げ、よだれを流し続けている。

「いいんだよ。」

私はねころんだ。

◎ 初冬の空にいわし雲がういていた。

目をつむる。

原野を風が転がっていつている。こずえが鳴っている。落ち葉が大地でこすれ合い、かわいた、かすかな音楽をかなでている。

顔にぼたりとしずくが落ちた。プールから上がったきたどんべえだった。

⑥ 私は目を開けたくなかった。

熱い鼻息がほおにかかった。しばらくして、かたくあらいくまの皮膚が、ざらりと顔をなであげる。どんべえは四つんばいになり、私に顔をこすりつけているのである。

そして、たまりかねたかのように、私の横に身を投げ出し、小さくうなりつつ、何度も何度も顔をこすりつけてきた。私はこらえきれなくなり、そんなどんべえを、⑦ きつくきつくかきいだくのであった。

※ のつぴきならぬ…避けることも退くこともできず、動きがとれない。

※ ヒゲ…作者の弟。動物飼育の協力者。

※ ムツゴロウ…作者自身がつけた自分のニックネーム。

※ 咆哮…動物などがほえさげぶこと。

※ 肺腑はいふをえぐるような…人の心に強い衝撃しょうげきを与えるような。

※ くぐもる…声などがこもり、はつきりしない。

(平成元年度版 東京書籍「新しい国語」1 畑 正憲 「対決」による)

一 ― 線部①「どんべえは」は、どこにかかりますか。最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

- 1 のどの奥から
- 2 クハ、クハ、と聞こえる
- 3 攻撃音を
- 4 出した

二 ― 線部②「手塩にかけて」の意味として最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

- 1 かなりの大金を支払っているさま
- 2 自分で世話をして大切にしているさま
- 3 とても冷たい様子で接するさま
- 4 たくさんの人の協力を得るさま

三 ― 線部③「今、この瞬間を最高に生きてやれ」について、次のようにまとめました。( )に入る適切な言葉を、文章中から、それぞれ指定された文字数で抜き出さない。

○ もはや自分の（ア 三字）に対するこだわりは消え、ただひたすらに「どんべえ」と  
（イ 二字）しなければならぬという思いに至った、ということを表している。

四 ― 線部④「何かに制せられ」とありますが、「私」は「どんべえ」を制したものは何だったと考えていましたか。本文中から十字で抜き出さない。

五 文章中の~~~~~線部Ⅰ、Ⅲのカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直し、楷書でていねいに書きなさい。

- Ⅰ アビせられ
- Ⅱ 逆立てて
- Ⅲ チョウテンに達して

六 — 線部⑤「双の目が赤く燃えるようだった。」について、各問いに答えなさい。

(1) ここで用いられている表現の技法の名称を書きなさい。

(2) また、(1)と同じ表現の技法が用いられているものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

1 …… 線部①「ライオンみたいにほえた。」

2 …… 線部②「私は踏みこんだ。無言で、ひとみに力をこめ。」

3 …… 線部③「初冬の空にいわし雲がういていた。」

4 …… 線部④「きつくきつくかきいだくのであった。」

七 — 線部⑥「私は目を開けたくなかった。」という表現について、あるクラスで次のような話し合いを行いました。次の

線部の（ ）について、文章中の言葉を使って、解答欄に合うように書きなさい。

坂口 どうして「私」は目を開けたくなかったのかな。

平野 自分に攻撃をしてきた「どんべえ」を許せなかったのかもしれないね。

永瀬 そうではないと思うよ。なぜなら、「どんべえ」が（ ）をしていることに対して、

「私」は（ ）からね。

坂口 なるほど。どうも怒っていたわけではなさそうだね。

永瀬 「私」は、ほっとした気持ちでねころんでいたんだと思う。

坂口 そうだね。風や自然の音を感じながら、たくさんさんの感情を味わっていたのではないかな。他にも考えられる理由はないかな。

平野 本文に「子別れの儀式」とあるから、「どんべえ」の成長をじつとかみしめていたのかもしれないね。